

平成 28 年 4 月 16 日から 6 月 10 日まで、パレスチナ自治区ガザ地区で赤十字国際委員会（ICRC）の救急医として、パレスチナ紛争犠牲者救援事業に派遣されました。

ガザ地区は、イスラエルとの長い紛争の歴史を持ちます。高い塀で外部との接触を断たれたその環境は、“天井のない牢獄”とも表現されます。50km×8km の細長いエリア内には、150 万人ものパレスチナ人がひしめいています。彼らの医療水準は高く、都市部では CT や MRI を備えた 500 床を超える規模の病院も見られます。医療者は、高い情熱と誇りをもって職に従事しています。しかし、地区全体に安定した医療を供給するためには、人的資源や物的資源があまりにも乏しいのが現状です。

ここでの私に与えられた主な任務は、3 つありました。1 つ目は、「効果的な救急医療」事業（EED）の推進です。EED は 5 本柱（トリアージ、群衆コントロール、一方向システム、書類の標準化、一般市民への啓蒙）からなります。2 つ目は、各施設にて医師・看護師向けの救急外傷治療講習（ER Trauma Course）を開催することです。3 つ目は、救急隊と救急室間のホットラインシステムを確立することです。主に 3 つの政府系外傷拠点病院を中心に、これらを実践します。この事業そのものは、2008 年に着手されていますが、空爆や内部事情から頓挫した時期もあり、2014 年 8 月の停戦以降、徐々に軌道に乗りつつあります。臨床的にはオブザーバーの立場からサポートしたので、臨床医として実際に患者さんと向き合う機会はありませんでしたが、“継続する医療システムを構築する”過程に、違った角度から携われたことは、私にとって大きな収穫でした。

ガザのある若い医師の問いが、胸に残りました。「日本は第二次世界大戦後の苦しい日々をどうやって乗り越え、克服したのか」と。先の見えない漠然とした不安と、隔絶された世界に生きなければならない鬱屈の中、それでも前を向く彼らの未来に、いつか自由と平和が訪れることを、心より願っています。



ガザの港



外傷治療トレーニングの様子